
戦国封魔伝

かんすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国封魔伝

【Nコード】

N1079Z

【作者名】

かんすけ

【あらすじ】

妖怪が跋扈する戦国時代を舞台に、退魔の法を身に付けた主人公が、魔術や武器を駆使して、魔物退治をしつつ、旅して行く予定です。

世界観は「信長の野望online」ですが、内容は行き当たりばったりで、適当な展開になる見込みです。

序段

大きな川のほとり、一人の男がのんびり釣り糸をたらしっていた。身の丈八尺、ひととき大きなその体には、雰囲気に似つかわしくない神主の衣を身にまとうていた。

時は戦国時代、ところは武蔵の国。周辺の情勢は、北条氏、武田氏、今川氏との間で三国同盟が結ばれ、一時続いていた小競り合いも、ようやく落ち着いてきたところである。

とはいえ、この世界には、いくさよりもさらに大きな脅威となりうる数多くの魔物たちがはびこっており、決して平和な世の中とは到底言えなかった。

畑を耕していた二人の農夫が、ふと手を休め、川岸で釣りをする男を眺めながら、言葉を交わす。

「本当にあの男は、ろくに仕事もせず、いい気なもんだな。」

その言葉を受けて、もう一人の農夫が口を開く。

「全くだな。今、神社は祭りの準備で忙しいだろうに、、宮司さまが、もったときつくおっしゃっていただければ良いのじゃが。」

農夫たちの会話をよそに、神主の身なりをした男は、ただただ釣り糸をたらしつつ、じっと川の流れを見つめている。

ふと気付くと、川上から流れてくるものがあつた。一見すると朽ちた木材のようだが、それは徐々に近づいてきて、ようやく岸にいる者からも分かるようになった。人の死骸だ。この時代、戦で死ぬ者もいれば、飢えて死ぬ者もいる。旅の途中で夜盗に襲われることも珍しいことではない。

釣り糸を垂らした男から、よく見える所まで流れてきたが、水に浮かんだ死骸の少し上に、空気が歪んだようなものが感じられる。注意すれば誰でも気付く、塵気楼のような、逃げ水のような、そんなものだ。

近くの農夫たちは気付かないが、男はそれを感じると、なにやら口元でつぶやきながら集中しているようだ。独り言のような、呪文のような、そのつぶやきが終わると同時に、男の手許が僅かに光ったかと思うと、歪んだ空気のようなものに向かって何かが飛んで行き、ぶつかった。

それと同時に小さな、空気のはじけるような音がし、その歪みのようなものは何もなかったように、消え去った。後には、ただの死骸が川下へ向かって、流れていくだけだった。

農夫たちは、何も気付かない。ただ、興味を無くして会話をやめ、再び作業に戻っていった。

ふと、近くの村の子供たちが、男に向かって遠くから声をかけた。

「おい！仁武！宮司様が、祭りの準備を早く手伝えって、言ってたぞー！！一緒にいた禰宜さまは、カンカンになって怒ってたから、知らないぞー！」

それを聞いて、仁武と呼ばれた男が立ち上がった。

「わかった、わかった！すぐに片付けて戻るから、先に神社に戻って、適当に禰宜さまをなだめておいてくれえー！」

「えーっ！？禰宜さま、しつこいから嫌なんだよなあ。じゃあ、今度、猪狩りに一緒に連れて行ってくれよあ！何度頼んでも、連れて行ってくれないじゃないか！」

男は少し考える。ひとしきりして、踏ん切りを付けると、

「よし、わかった！お前たちの父ちゃんたちをきちんと説得して、許しをもらったら、次に狩りに行くときは、連れて行ってやろう！分け前もみんなで山分けた。」

その応えを聞いた子どもたちは小躍りしながら喜んで、

「よーし、約束だからな！禰宜さまは俺たちに任せろ！」元氣よく返事をして、神社のある方角へ向けて、走って行く。

男は、その様子を見ながら苦笑いしつつ、小さくつぶやく。

「うーん、仕方ねえ…、次の猪狩りはいつの予定だったかな…。とりあえず、暇を見付けて山を抜いに行かないとな…。」

我にかえると、慌てて釣り竿をしまい始める。子どもたちが間を取り持ってくれるとはいえ、苦手な者のご機嫌取りの為には、一刻も早く神社に戻った方が良いのは、言うまでもない。

身支度を整えた男は、右手を胸の前に構え人差し指と中指を絡めるように印を組むと、呪文を詠唱する。

『…我が身に神速の加護を与え賜え…』

日が傾きかけた畦道を、疾風のような人影が走り抜けて行った。

釣りをしていた河原から、戻るべき神社までの距離は、女や子供の足でも、四半時も歩けば着く程度の距離だ。仁武が唱えた呪文は『神速の術』というもので、これを唱えると、単純に速く駆け回ることができるようになる。術者の技量や熟練度によって効果に多少の違いは出るものの、概ね通常の速度の2～5倍程度の速さになる。持続時間はせいぜい四半時だが、神社に着くには充分だ。

神社の鳥居の下まで来ると、早速、禰宜に捕まった。禰宜というのは、神職の役職の一つで、この神社での序列は2番目だ。もちろん1番目は、この神社の総領である宮司ということになる。

「おいっ仁武！お前、村の人たちに頼まれて、河原の掃除をしてい

たというが、本当か！？先ほど、村の子供たちがやってきて、そんなことを口走っていたが……。お前のいつもの行動からすると、俄かには信じがたい。本当は、ただ祭りの準備を抜け出して、さばっていただけではなからうな？」

村の子供たちが、うまく語ってくれたのか、ここは話の流れに乗っておく。

「いやあ、本当に参りましてね。数日前の大雨のせいか、上流から随分と瓦礫が流されてきていたみたいで、取り除くのにかかっつて、大変なのなんのつて……。」

「うーん、怪しい気もするが……。とにかく、今、若い者たちは宝物殿の掃除に行っているから、お主も早くそちらへ行つて手伝つて来い。」

その後も納得をしていないのか、ぶつぶつ独り言をつぶやきつつ、禰宜は本殿へ向かって歩いていった。

仁武は、この口うるさい禰宜が苦手だ。禰宜は、名前を「相敬」と言い、半年ほど前に鎌倉にある他の神社から、この神社の宮司に請われて移ってきたのだが、元々神経質で生真面目なのか、この神社、「六所宮」に勤める者、皆の行動や働きぶりに目をやり、やれ「身なりがきちんとしていない」だの、「挨拶が作法に則っていない」だの、やたらと口うるさく言ってくるのだ。言っていること自体は間違いではないのだが、言い方がガミガミとしていて、仁武としては、心の底から辟易としていた。

仁武自身はどうかといえば、これはもう筋金入りの怠け者として近隣の町や村ではすっかり名が知られており、このあたり、自業自得と言えなくも無い。

ここ六所宮は武蔵の国の中でも、歴史も由緒もある神社で、規模としては非常に大きいと言える。もともとこの土地は、古くは平安時代から武蔵の国の国府、つまり役所が置かれたところであり、町としても歴史が古い。六所宮という名前は、武蔵の国に散らばる六つの神社を取りまとめている神社ということから付いた名前であり、その意味で「武蔵総社」とも呼ばれたりしている。

仁武はこの神社で、権禰宜、つまり禰宜のそのまた下に位置する一般職員のようなものだった。

そもそも仁武は、神職に縁があつた訳でもなければ、自ら目指した訳でもない。ただこの神社の鳥居の前に捨てられていたのを、拾われただけだ。

それ自体は珍しいことでもなく、普通は神社のはからいで、どこかの家に貰われていくか、どこかの農家に引き取られ、小作人になるか、いずれにせよ、神職になるという者は、殆どいない。

ただ仁武の場合、特殊だったのは、捨てられた時に、神職の武器である弓と、普通ではなかなか手に入らない破魔矢と一緒に置いてあったことだ。

弓自体は侍も使うが、破魔矢は神職独自の武器であり、神社に縁のある者が何か訳があつて託したのかとも思われたのだ。これによって、仁武はこの神社の目に止まることとなり、宮司自らの強い意向もあつて、この神社に引き取られることとなったのだ。

仁武も、そのことを恩に感じ、宮司に対してはそれなりの対応をするものの、生来のものぐさな性格は、簡単に治るものでもなかった。

結局、禰宜の口うるさい追求をなんとか逃れた仁武は、他の権禰宜たちが作業をしている宝物殿へと、歩いて行った。

相敬は、仁武に背を向けて歩き出すと、そのまま本殿へと向かった。すると、丁度宮司と、ばったり出会った。ここぞとばかりに、仁武に対する愚痴を話し出す。

「宮司さまからも、仁武におっしゃっていただけませんか！？私の手には、正直なところ、もう手に負えません！だいたい今日だって祭りの準備を放り出して…」

止まらない相敬の愚痴を、苦笑いしながら、宮司が返す。

「まあまあ、そんなに熱くならずとも…」

宮司は、苦笑いしながらなだめる。この宮司の名は、鴻武と言い、面倒見の良さや人当たりの柔らかさから、住民たちからも慕われており、一方で神職として魔物を退治する力も、武蔵の国でも指折りの実力者として知られていた。

鴻武自身は、周りから思われているほど素晴らしい人格であるとはこれっぽっちも考えておらず、むしろ面倒事が嫌いで、誰か真面目な人材はいないかと考えた挙げ句、相武をこの神社へ呼びよせたのだが、そのような事は誰も知らない。

しかし、ふと真面目な目つきになると、鴻武は相敬に尋ねる。

「時に、相敬殿、武蔵の国のなかでも、このあたり、武蔵府中の近辺は魔物の出没が少ないが、理由を考えたことはありますか？」

相敬は、突然このようなことを聞かれて、少々戸惑いながら応える。

「さあ、このあたりは古くから栄えていましたし、かつては鎌倉の幕府からも手厚い保護を受けたりしていましたから、元々魔物がはびこりにくかったのかもしれませんが……。」

自身なさげではあるものの、思ったことを口にしてみる。

それに対して、鴻武は返す。

「いや、私は思ふのじゃが、よく仁武が近隣の村々をまわったりしているのも、それなりに魔物たちを警戒させて近寄らせないのに、一役買っているのではないかと。それであれば、あの者の遊び癖も、全く害ばかりではないと言えませぬかな？」

思わず、相敬は笑い出す。

「いえいえ、宮司さま。いくらなんでも、それは買いかぶりすぎですよ。仁武は確かに、神主としては弓の腕がたちますが、『退魔の法』は、まだまだ未熟だと聞いていますよ。いくらなんでも、村々で遊びほうけながら、片手間で魔物退治などできるものではないですよ。」

相敬が一笑に伏してこの話は終わるのだが、鴻武はその思いを捨てた訳ではない。遊びほうけているように見える仁武が、その大きな体を人知れず鍛錬していることも宮司は知っており、『退魔の法』

も未熟ではありながら、『術』を発動させる媒介となる弓と破魔矢さえあれば、その力は宮司よりも上ではないかと見ている。しかも、実際の戦いの場面に立ち会ったことはないが、仁武が時折見せるしぐさや、洞察力の鋭さから、底知れぬ才気を感じさせられもして、身内びいきだが鴻武は仁武に期待を持っているのだった。

序段（後書き）

信長の野望onlineの世界観をベースに、ストーリーを進めた
と思います。

更新は、時間かかりそうですが、マイペースで頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1079z/>

戦国封魔伝

2011年12月22日16時50分発行